

『お狐さまと強気な花嫁』

著：高月まつり

ill：明神 翼

徳利が壊れて現れたのは、一匹の子（こ）狐（ぎつね）だった。黒いソックスを履いたような四本の足に、モフモフの尻（しつ）尾（ぼ）の先はおろしたての筆のように白い。どうやって徳利の中に入っていたのか知らないが、愛らしいことこの上ない。

そして「可愛い」以外の言葉が出てこない。啓斗が英語で放送禁止用語を叫ぶ横で、理宇はゆっくりと腰を下ろして、子狐に手を差し伸べた。

「ようやく外に出られた！」

子狐は「コン」と鳴かずに人語を話す。

「……その、ええと、俺はどちらかということ……目の前のものを素直に受け入れるタイプなんだが……お前は狐の形をしているだけで別の生き物なのか？ もしや妖怪？」

すると子狐はふっと尻尾を揺らして胸を張った。やっぱ可愛い。

「人の言葉を喋（しゃべ）る段階で気づけ馬鹿者。俺をそこいらの妖怪と同列に扱うな。俺は尻尾が十本になったら神格を得て天に昇るんだからな！ 喜んで奉仕しろ！」

威張って尊大なことを言っている、外見の愛らしさに「ギャップ萌え」に拍車がかかる。

やけに太いと思っていた尻尾は、よく見ると複数あった。目で右から数えていくと、全部で九本。尻尾でふかふかのクッションが作れそうだった。

「奉仕って……」

「お前は世乃山の血筋だろう？ ならば俺の下僕だ。いや、下僕は言葉が悪いな。ここはいつそ……あれだあれ、嫁だ！ 異種族婚や神と人間の婚礼の話は世界中にある。問題ない」

「こら。可愛い顔で言うことか？」

理宇は思わず子狐の長い鼻先を掴んで、「黙れ」と言った。子狐はふんふんと鼻息を荒くして逃げようとするが、理宇の力が強いのか逃げられないでいる。

「……理宇、おい理宇。一応、動物虐待になりそうだからさ、もう少し優しくしてやれよ」

啓斗はまずは子狐の味方をした。九本ある尻尾は見ないことにしたようだ。

「俺に嫁になれって言ったんだぞ？」

子狐はこれ以上ふぐふぐ言うのが嫌（いや）になったのか、突然カッと輝く。余りの眩（まぶ）しさに、理宇は子狐から手を離して両手で目を庇（かば）った。何が起きたか分からないまま、ゆっくりと辺（あた）りを探るようにして、そっと目を開くと……。

そこにはもう愛らしい子狐はいない。

いるのは、金色に輝く巨大な狐だ。

触れたら柔らかそうな体毛と、立派な体（たい）躯（く）。煌（きら）びやかな装飾にも似た九本の尻尾は、風もないのに揺らめいている。

「愛らしい姿の方が話しやすいと思った俺の心遣いを台無しにしたな。まったく世乃山の血筋は昔から一（ひと）筋（すじ）縄（なわ）ではいかん」

「俺のうちを知っているのか？ 親からは何も聞いてない」

「そうともさ、俺は百年前にさっきの壺に封印された」

「徳利な。あれ、酒を入れる物だから」

「な！ だから俺が匂いに誘われたのか」

大狐は目の前で「くそう」と低く呻（うめ）いた。ちょっと間抜けだと思ったが、何が起きるか分からないので、理宇は心の中で思うだけにする。

「悪さをしたから封印されていたのに、俺がその封印を解いてしまったというわけか。さてどうするか。さっき友人に、四十までは生きられるように努力すると約束したばかりだ。ここで食われるわけにはいかない」

「だからお前、まて。俺の話を聞け」

狐はその場に座り込む。長話が始まるのだろう。理宇も腰を下ろして胡座（あぐら）をかいた。啓斗は神妙な顔で腰を下ろし体育座りをした。

「俺はこれっぽっちも悪さなどしていない」

「じゃあなんで封印されたんだよ」

「お前らの一族が！ 散（さん）々（ざん）俺に世話になっておきながら！ 奉仕もせずにはいたから！ だから！ 嫁を寄（よ）越（こ）せとほんの少し、いつもより積極的に言ったら！ 旨（うま）い酒の入った徳利に封印された！ というわけだ！ だからお前が、一族の責任を取って俺の嫁になれ！ 狐の嫁入りは王道だろうが！」

前脚でバンバンと床を叩きながら、大狐が主張する。

「なんで俺が一族を代表するんだよ」

「……世乃山の一族は、もうお前しかおらんだろうが」

大狐は「お前以外に世乃山の匂いはしない」と鼻を鳴らした。

「そうか、分かるのか。さすがは妖怪だ」

「そうだと。だからお前は俺の妻になれ。そして奉仕をしろ」

「……俺の一族は、そんなに狐に世話になったのか？」

百年前の出来事を知る世乃山家の人間は、すでにこの世にいない。

理宇は首を傾（かし）げながら大狐を見た。

「願（がん）をかけて、叶（かな）ったら礼をする。人間は欲深い。我らはこの手の人間の生臭な願いと相性がいいのだ。お前らは小さな体でよく働いていた。祭りもよく行った。だから俺も、鎮（ちん）守（じゅ）の森に住まう身として、力を使ってやった。神ではないから、妖力を使ってやったに過ぎんがな。俺が徳を積むには十分だった。なのに世乃山の一族ときたら！」

ここで大狐はわざと大きなため息をつく。

「なんだよ」

「俺に恩を返す前に、さっさと死におった。あれほど、叶ったのならすぐに恩を返せと言ったのに。みなそうして、恩を返す前に死におった。何度も何度も俺は言ったのに、お前らの短命はなんなのだ？」

狐も呆（あき）れるんだな。そんな面白い顔初めて見た。

理宇はそんなことを思いながら、「恩を返すって、具体的に何をどうするんだ？」と尋ねる。

「供え物が欲しい」

それなら。うちでしばらく養えばいい。幸い持ち家だ、大狐の一匹ぐらい飼える。

「俺の美しい毛並みを保て」

ブラッシングか。大型犬用のブラシを買いに行かないとな。

「嫁なんだから添い寝もして欲しい」

嫁はともかく、添い寝ぐらいならしてやる。これから寒くなるから、こちらとしてはむしろ好都合。

「あと、子供は四人ぐらい欲しい」

子供は嫌いじゃないが……と、ここでようやく理宇は顔を上げて大狐を見た。そして思いきり眉間に皺を寄せる。

「なんだその顔は」

「性別的に無理だろうが、ケモノの妖怪！」

「そこは俺に任せておけばいい」

自信満々に言う大狐。

理宇は今度は腕を組んだ。

「真（ま）面（じ）目（め）な話、もし俺が妊娠できたとして、だ。きっと長生きできないで死ぬぞ」

「なぜ」

「そういう家系だ。……お前がうちを呪ってるなら、一回ぐらいなら子供を産んでやるから今すぐ呪いを解いてくれ」

それには、今まで黙って聞いていた啓斗が「子供を産むのは簡単じゃないんだぞ！」と突っ込みを入れた。

「呪いなどかかっていない。世乃山一族が短命なのは、そういう血筋なのだとしか言いようがない。ただ」

「なんだ」

「もうすぐ神格を得る俺と交わるなら、寿命は延びるだろうな」

「セックスするなら、お前が神格を得てからの方がいい」

「あと二百年ほどかかるが」

「短命じゃなくても、普通の人間ならとっくに死んでる」

「だから！今のうちに俺の嫁になって交わっておけ」

大狐はのっそりと体を起こし、濡れた鼻先を理宇の胸に押し当てる。

「……世乃山家が傾きもせずやってこられたのはお前のお陰なんだろう。百年前に頑張ってくれたお陰で、今も土地家屋を失わずに済んでいる。だから俺は、一族を代表して恩を返す。百年前の恩でもな。うちで養ってやるから今の世の中を堪（たん）能（のう）してこい。百年経ってるんだからかなり変わってるぞ？これでいいな？」

よしよしと、狐の鼻面を撫（な）でて理宇が言った。声に、確認というより強制的な強さがあった。

「俺の嫁になるのはいやなのか？」

「やだよ。動物相手に何をするんだよ。俺に獣姦の趣味はない」

「これでもか？」

大狐がふわりと浮いて、くるりと一回転する。

するとそこには、黄（こ）金（がね）色の髪を持った長身の美青年が立っていた。啓斗が「アメージン

グ」と言って口笛を吹き、理宇も思わず目を見張る。

妖怪というのはみんなこんな綺麗（き）麗（れい）な顔をしているのだろうか。それとも、人間を誑（たぶら）かすために、美形に変身するようプログラムされているのか。そういえばマンガに出てくる狐は美形が多い。理宇はひたすら感心して、人に変（へん）化（げ）した大狐を見つめた。好みだった。触り心地の良さそうなサラサラの髪に、気持ちつり上がった二（ふた）重（え）の目、高い鼻に桜色の薄い唇。とにかくすべてが、とても好きなタイプの顔で、見つめているこっちの顔が赤くなる。ああでも、ずっと見つめていたい。形として遺（ゆ）したい。思わず右手をツナギの尻ポケットに移動して携帯端末を掴むと、人間（仮）の大狐をカメラに収めた。

啓斗が「お前なあ」と呆れ声を出す、気にしない。

「この姿なら、いくらでも人間と交われるぞ！お前、いい加減俺に名前を教えろ」

「名前を知られると、相手の命令を聞かなくちゃならないとかあったら困る」

「そんなことがあるか」

美形に鼻で笑われるともの凄い屈辱なのだと、生まれて初めて知った。苛（いら）つく。本能が苛つく。こんちくしょう。

理宇はムツとした顔で「世乃山理宇だ」と答える。

「ふむ。俺は山（やま）吹（ぶき）という。俺の目玉の色と同じだ。美しいだろう？」

自信満々に威張る山吹は、実はさっきから全裸だった。

山吹には、理宇の服ではサイズが合わないので啓斗の服を着せた。

てっきり髪はラプンツェルのように長くなるかと思ったが、長めなのは前髪だけで襟（えり）足（あし）は短く揃（そろ）えてある。短くても、キラキラと輝いた。「便利屋」の従業員には帰国子女と説明しよう。啓斗がいるから、啓斗のアメリカ時代の後輩にしておけば、多少バカをやっても「アメリカと間違えた」ですむ。アメリカには全力で謝らせていただく。

「服を着る暇があったら、俺はさっさとまぐわいたい」

「男はデリケートなんだから心の準備をさせろ！」

抱き締めてこようとする山吹の手を叩き落としながら、理宇は「エロ狐」と罵（ののし）った。

「……二人とも落ち着いて。とにかく今は買い物に行ってきたよ。山吹の服と靴が必要でしょ？今日の午後のスケジュールに、所長さんはいらさないからさ。なんかもう、妖怪が下世話すぎて怖がっている方がバカみたいだよ、ははは」

ああ、そうですよね。全裸で「セックス！」と迫ってくる狐だもんな。呆れるよな。

仕方ないと、理宇は山吹を連れて買い物に出かけた。

ずっと徳利の中にいたからさぞかし現代は面白いだろうと、はしゃぐ様子を観察しようとしたのに、山吹はキョロキョロするどころか堂々と歩いている。むしろ通りすがりの人々の方が挙動不審だった。

「この顔は現代の方が威力があるな。いいことだ」

注目を浴びて当然と、山吹は上機嫌で微笑（ほほえ）む。すると、周りから「きゃっ」と控えめな黄色い悲鳴が聞こえてくる。なんというか、ちょっと面白くない。

「いっそ子狐になればいい。そしたら、みんなに撫でてもらえる……ああ、撫でられるのは無理か」

「なぜだ？」

「狐には寄生虫がいるから」

「まったく失礼な嫁だな。俺は大妖だぞ？身だしなみに気を使っている大妖だぞ？」

確かに山吹はいい香りがする。百年も徳利の中に閉じ込められていたにも拘（かか）わらず、埃臭くも饅（す）えた臭いもしない。灰（ほの）かに甘い、嫌みのない香りだ。

しかも、量販店の服を高級ブティックの服のように着こなしてしまうのだから、この妖怪はお洒落（しゃれ）だ。

隣を歩いていると、ちょっとした敗北者気分を味わえる。

「あら理宇ちゃん、外国人のお友達？」と聞いてくるのは、近所に住んでいる老人たちで、理宇の会社をちょくちょく利用してくれるありがたいクライアントだ。茶飲み話の種にされるのは分かっているも、「はい。帰国子女なのでお手柔らかに」と笑顔で答える。

彼女たちは「いい男ねえ」「眼福」とそれぞれ言いながら、小分けされたゼリー菓子を理宇のジャケットのポケットに何個も突っ込んで「あとで食べてね」と言った。

「俺はあの輪に入って茶を飲んでいてもよかった」

「やめてくれ。そうでなくても、あの人たちは俺に見合いを勧めてくるんだ。うちの家系のことを知ってるくせに、今度は大丈夫かも知れないって……見合いの相手に失礼だろ」

嫁（とつ） いたら自分まで短命になる不思議一族に、今日（きょう）日（び）、誰が好き好んで嫁ぐのか。保険金目当てぐらいしか考えられないが、それはそれで嫁も短命になるのだから諸（もろ）刃（は）の剣（つるぎ）だろう。

「俺なら問題ない。むしろ、俺の寿命が百年二百年削られても痛くも痒（かゆ）くもないぞ？ だから安心して俺の嫁でいろ」
またこれだ。

人（じん）外（がい） だから何でも許されるとしても、人間には人間のルールがある。それを守らなければここで暮らしていけないのに、この狐は分かっている。

「人のことを嫁嫁言うけど」

はい切符、と、券売機で買った切符を山吹に渡して、自分はカードを使って改札を通る。

「おお」

山吹は切符をマジマジと見つめてから改札に通した。まではよかったが、切符を受け取るのを忘れて理宇が慌てて取りに戻った。

「なかなか面妖なカラクリだ」

「……カードを作るか。いちいち切符を買わなくてすむし、コンビニで買い物もできる」

「供（く）物（もつ）か」

「まあそんなところ」

首から提（さ）げるパスケースを買って、カードと緊急連絡先を書いた紙を入れておこう。そうすれば、最悪迷子になっても帰ってこられる。理宇は山吹が大妖だということをすっかり忘れ、迷子対策に思案を巡らせた。

電車に乗って一つ目の駅で降りる。この繁華街にはバスでも行けるが、今の時間は本数が少ないので電車の方が早い。

「人が多いから、迷子になるなよ？」

「手を繋（つな）いでいいのか？」

一瞬眉間に皺が寄ったが、山吹が迷子になる方が大変だと判断して、すっと右手を差し出す。

「お前の服と靴を買って、帰りは地元の商店街で晩飯の買い出しだ」

「お前ではなく、山吹と呼べ。本当は山吹様と呼んでほしいが、無理強（じ）いはできん」

自分より頭半分大きな狐野郎は、背中を丸めて「山吹だ」と言った。

ちくしょう。不覚にも可愛いと思ってしまった。でかいくせに、上目遣いなんてすんなよ！ 気持ちが落ち着かない！

「……分かった」

理宇は視線を泳がせ、山吹の左手を強く握り締めたまま歩き出す。

案の定「アレ見て」「うわ」「男同士だよー」とこそこそ囁（ささや）く声が聞こえてきたが、気にしない。気にしたら負けだ。頑張れ。

山吹は機嫌良く辺りを観察している。

「昔とは比べものにならない。凄い人混みだ。だがいいこともある」

「ん？」

「おなごの脚が丸見えだ。はしたないが目の保養」

「……俺に嫁になれと言っておきながら、その言いぐさ。はいはい、俺は一族の義務でお前の世話をします」

「そう言うな。俺はお前の運に惹（ひ）かれた。そして、とんでもない運にも拘わらず、平然としているお前も面白いと思う。ちゃんと生きた人間の顔をしている。あそこのおなごたちは、お前ほど興味深い運は持ち合わせていない」

本文 p16～30 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>